Akita University

NES型学習自己評価法の工夫と改善(2)†
～特別支援学校，特別支援学級での試験的実践応用に関する考察～

森　　和彦*
秋田大学教育文化学部

量評価や基準を必要としない自己評価を特別支援教育に持ち込むために，NES型学習自己評価法が提案された．その結果，1）たとえ非言語的であっても自分の意見や意図を伝えようとする児童・生徒はNES型学習自己評価法を活用できる，2）自己評価に教師のコメント指導は欠かせない，3）NES型学習自己評価法は学習者の意欲の向上に繋がる，そして4）教師の授業改善にも繋がることがわかった．

残された課題としては，実施する教師がNES型学習自己評価法の考え方を効果的に理解できる説明法の開発が上げられた．

キーワード：学習自己評価，関心領域の宣言，特別支援教育

1.　問題提起と目的

1－1.　自己評価のねらい

自己評価のねらいは，1）自己評価能力を高める，2）表現することにより学習者間で相互に啓発する，3）計画・方法の修正ができる（目標設定），4）学習の成果を明らかにする（成就感），5）課題を明らかにする（発展性），という点にある．この様なねらいに沿った自己評価であるためには，自己決定感を育てる評価であるばかりか，自己有能感が感じられる評価が必要である．これらは文部科学省小学校新学習指導要領第一章総則第４の２の（2）および（4）に基づいている．すなわち，観点や課題の設定や選択をある程度学習者本人に任せないと主体性は持てない．そして自己有能感を獲得するためには，否定的評価よりも事実認識に基づく肯定的評価の方が有効であろう．となれば，個人の関心，意欲，環境に応じた要求水準の設計も必要になると想定される（Weiner, 1972）．言い換えれば，自己評価は，1）今までやっていないことを行うという意欲を持たせるために，自分が成長していること（有能感）に気づかなければならない．また，教師や，親，仲間，社会による他者評価が「所属する社会における行った結果の意味」を示す一方で，2）確認行為としての自己評価の報告は，他者評価と同様に「所属する社会と共有できる」，または「所属する社会に承認を得る」という動機づけにも繋がる意味を持つ必要がある．しかもこの両者の過程において，目標の見直しや行為の修正があるとしても，それは肯定的な枠組みで表現できる必要がある．このような観点から自己評価を省みれば，基準を明示して出来高を問うABC評価は自己評価には必ずしも適切ではない（森ほか，2010）．したがって必要とされる自己評価とは，次のようにまとめられる．自己評価は，評価を表現する意味があって，自己効力感，学習意欲につながり，教師の指導にも役立ち，情意面からプラス思考に基づく質的名義尺度で表現させる：良いところを見つけ合う発見行為（Appreciative Inquiry）でなければならない．そして本研究では，これらの背景条件から，自らの評価の関心（評価力点）が，どこに向いているかを宣言させる方法が自己評価として適切であると仮説を立てた（森ほか，2010）．すなわち，内容の改善に向いている（N：Need

2014年２月14日受理
† Open Clinical Trial Testing of NES-typed Self-Evaluation at Classroom for Special Needs Education with respect to Each Learning Task
* Kazuhiko Mori, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

Akita University

to improve）のか，自己効力感を感じる方向へ向いている（E : Efficacy of Self）のか，達成感の確認に向いている（S : Satisfactory outcome）のかを宣言して，評価の根拠を言語活動（書き言葉・話し言葉）で表して仲間と共有化する方法である．

1－2.　NES型学習自己評価法

そこで本研究のNES型学習自己評価法（以下，NES評価）は，自己評価を順序尺度（程度の申告）ではなく，学習の情意・向上面に焦点化させた名義尺度（関心の宣言）で構成し，N/もっと良くしたいところがある，E/とても良く頑張ったので自分を誉めたい，S/ここまでできれば十分満足でき，充実した時間だった，という評価力点を選択させて，その内容・根拠を表現させる方法を採用した（表１参照）．この成立過程については森ほか（2010）に詳述したので参考にされたい．この選択肢は教師の授業改善のための確認になるほか，評価基準を示しての比較をせずに自己評価ができるなどの特徴を持ち，実際に小学校低学年児童にも活用可能（森ほか，2010ならびに森，2012）であった．ではこの方法は特別支援学級や特別支援学校において，学習の振り返り可能な児童・生徒には有効と言えるであろうか．

表１　両評価の関係

評価視点		基準に基づく評価		
	評点	A:基準を十分超えて優れている	B:基準を満たしている	C:基準を満たしていない
興味・関心の力点に基づく評価	N:もっと良くしたいところがある（課題を見つける力：意欲・関心）	向上心、発展性を褒める。	向上心、発展性を褒める。	向上心、気づきを褒め、改善案の良いところを認める。
	E:とてもよく頑張ったので自分を褒めたい（自己効力感）	教師・仲間による支持・再評価を加える。	教師・仲間による支持。発展課題に導く。	自己効力感を支持。改善点・改善案に気づかせる。
	S:十分満足でき、充実した（肯定的環境評価力）	教師・仲間による優れている点を支持・再評価	教師・仲間による支持。ケースによっては発展課題に導く。	仲間との体験の共感を支持・確認。改善点・改善案に気づかせる。

1－3.　特別支援学級・学校での運用上の課題

本研究で前提とするのは主として軽度知能障碍に関わる児童・生徒である．この場合，選択された評点の根拠を言語的に表現することは難しいかもしれないが，NES評価はABC評価と異なり，評価基準を事前に理解しておく必要がなく，否定的な表現がないので，むしろ軽度知能障碍に関わる児童・生徒に適しているのではないだろうか．本研究では指導と評価の一体化の観点から，出来の程度ではなく学習活動の関心事を宣言して振りかえさせるNES評価が軽度知能障碍の児童・生徒の学習改善にも有効であると仮説を立て，1)「実際の授業」の振り返りカード内容の質のみならず教師の授業改善力の自己評価も上昇するようなNES評価を開発し，2）NES評価の特別支援学校・特別支援学級向けの運用指針を抽出することを目的とした．

2.　方法

研究実践担当：A県FおよびY特別支援学校，ならびにA県内の特別支援学級を担当する有志の教員．

参加児童・生徒：実践授業に参加する小学三年生から高校三年生までの主に軽度知能障碍を有する児童・生徒．

実践授業：各授業内で実際に実施された授業は国語，算数，生活単元学習，作業学習．なお自己評価を用いる単元，抽出する児童・生徒，および期間は，非限定的臨床応用法（森，2012）に従い，担任教師が児童・生徒の実態に合わせて選択する．このような非限定的な臨床応用を試みる理由は，これら限定しなかった項目の自由度がこの自己評価尺度の運用の発展形，最適化への方向性を明らかにすると期待したからである（森，2012）．強制的，限定的に実施し，この手法の有効性を検証する方法もあるが，非限定的臨床応用の測度は，むしろ現場の教員に日常実践の中で使ってもらえるかどうか，どのような展開や応用がみられて自発的発展性があるかどうかにある．言われたままの，形だけの短期間の実践しかほとんど出てこない場合は，この手法が現場では思うように使えない課題があることを意味する．

実施期間：2012年７月から2013年12月まで

手順：

1）　担当教師に学習活動の良いところを宣言して表現するNES評価の背景，先行実践による導入方法や事例の説明を行う．この導入条件は，①自己評価を順序尺度すなわち量や程度の自己申告ではなく，情意の質的カテゴリーである関心・意欲，自己効力感の宣言，成就感・充実感を選択させる名義尺度で実施する．量ではないので数字や記号ばかりでなく絵でも良い．また，口頭や動作によるカテゴリー表現も可能である．②学習の理解度の自己評価では

Akita University

なく，プラス思考（Seligman & Csikszentmihalyi, 2000）に基づいた学習の情意的側面としての関心・意欲，自己効力感，成就感・充実感を発見させる自己評価とする．したがって否定的表現が無いようにする．③「どこを見るのか」という評価規準を学習者自身が選択して自ら目標設定しやすいように，観点別の評価とし，できるだけ質的な係留点としての言葉や記号で表現させるが，色，特定動作も可とする．④自己評価の選択理由ができるだけ表現できるようにし，評点に対応するフィードバックコメントによって教師の言語活動の指導とも連携可能な評定表現方法や振り返りシート等を工夫する．⑤授業の振り返りの時間において，NES型の自己評価に基づく振り返りの発表により，支持・承認・称賛の意味が含まれるように仲間との共有化（シェアリング）を促す．なお，現場などの事情で説明が1時間のケース（B, C, D）と，ワークを含めて6時間近く説明できたケース（A, E, F）がある．

2）各単元，授業において成績評価や個人目標に関わる授業内容の観点を複数用意し，教師によって工夫されたNES評価を振り返りカード等に組込む．授業後，振り返りカードに記入する，または評点の選択を行う形で自己評価を実施する．

3）振り返りカード等の結果内容を分類・分析し，NES評価による授業改善の有効性と実施条件について考察する．

3. ケースごとの結果と考察

3−1. 特別支援学校高等部作業学習（さをり織り）のケースA：

手順：①担当教員に自己評価NES評価尺度の評定意義を説明する．②授業で作業日誌にNES評価を取り入れることを伝え，実施する．③NES評価を取り入れた実習日誌及び担当教員，生徒の反応・評価方法の問題を収集し，考察する．

結果と考察：作業面と態度面に分けてNESに○をつけて横の欄にコメントを入れる形式（図1）が考案され，10名のデータ（3年生1名，2年生6名，1年生3名）が分析対象とされた．1）それまでABC型の自己評価になれていたため，変化への抵抗が大きく，2）最初は「複数つけても良い」，「すべて肯定的な評価」という意味が理解できなかった．3）コメント指導を繰り返して慣れてくると，学期ごとの目標（作業面・態度面）に対応した本時の目標が意識しやすくなった．4）評価に要する時間が減った．5）マイナス評価が少なくなり，作業意欲の向上に繋がったと担当教師は評価している．ただし，6）生徒によっては視覚的な評価方法が必要，7）生徒と教師の日々の関わりが前提条件，8）個人の自己評価を共有し，高め合うところに持っていくには別の方法が必要であると思われた．

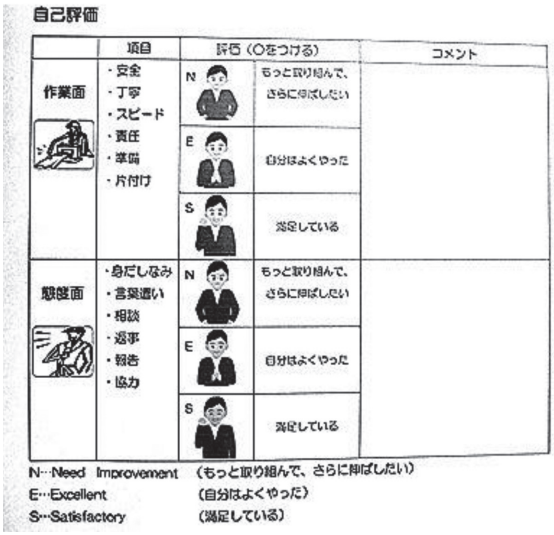


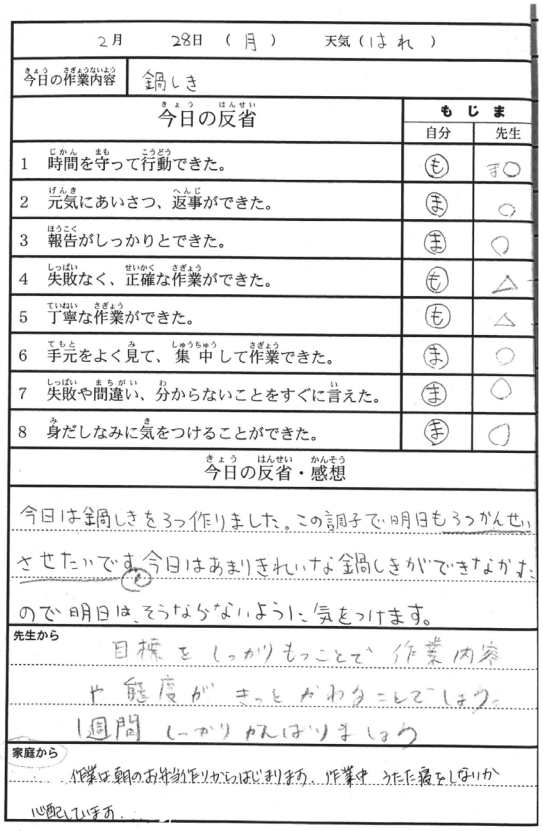
図1　ケースAにおける振り返りカード例

3−2. 特別支援学校中学部作業学習（紙工，縫製）のケースB：

方法：8つの観点別自己評価による「もじま式（森，2012）」のNES評価記入欄と並行して教師の○△×評価欄があり，その下に生徒，教師，保護者のコメント記入欄もある振り返りシート（図2）が用いられた．実施教員の報告文書と対応する実際の振り返りデータが集められた．

結果と考察：1）評点の分布は個人で異なる．「もじま」各々のニュアンスが伝えきれていない．2）教師の評価やコメントも入り，観点別でもあるので授業や教師のねらいをくみ取りやすく，課題も見つけやすい．そのため抽出された4名の生徒ではN評点の「も」を20%前後採用していた．ただし，それ以外の3）自己肯定感の表明が多い生徒はE評点の「じ」しか使わず選択にならない．4）同様に○×は結果から明らかであるが，△がわからない生徒が多

Akita University



2月　28日（月）　天気（はれ）

今日の作業内容：鍋しき

今日の反省	もじま 自分	もじま 先生
1 時間を守って行動できた。	㊋	㊋○
2 元気にあいさつ、返事ができた。	㊋	○
3 報告がしっかりとできた。	㊋	○
4 失敗なく、正確な作業ができた。	㊋	△
5 丁寧な作業ができた。	㊋	△
6 手元をよく見て、集中して作業できた。	㊋	○
7 失敗や間違い、分からないことをすぐに言えた。	㊋	○
8 身だしなみに気をつけることができた。	㊋	○

今日の反省・感想

今日は鍋しきを3つ作りました。この調子で明日も3つかんせいさせたいです。今日はあまりきれいな鍋しきができなかったので明日は、そうならないように気をつけます。

先生から：目標をしっかりもつことで作業内容や態度がきっとかわることでしょう。1週間しっかりがんばりましょう

家庭から：作業は朝のお弁当作りからはじまります。作業中うたた寝をしないか心配しています。

図 2　ケースBの振り返りシート例

く，この生徒らはNES評価も理解できているようには思えない．結局，振り返りに基づく改善が普段の学習で見られない生徒には適用はできない．また実施教員のコメントから，5)「できた/できない」の評価ではないことを，実施した教師も生徒も十分理解していないことが分かった．これは1時間程度の事前説明では無理があるのかもしれない．

3−3.　特別支援学校高等部作業学習（サービス班，清掃作業）のケースC：

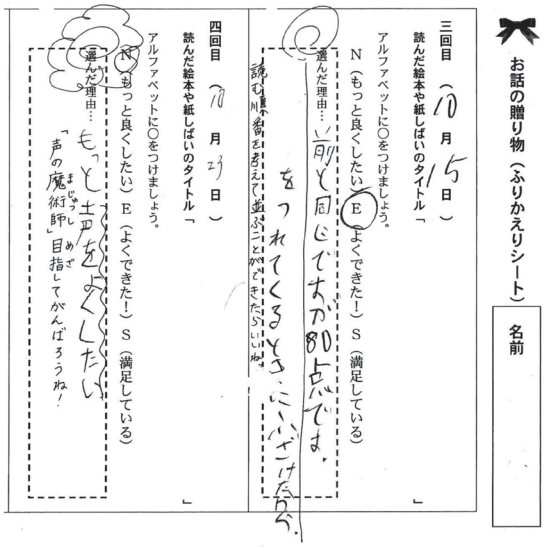
方法：作業学習（清掃作業）において，字の読み書きがある程度できる生徒に対して，作業手順確認表付きの振り返りカードへの記入を行った．期間はほぼ2ヵ月間で，20回の作業学習が行われた．カードには「1. 満足したこと　2. 自分をほめたいと思ったこと　3. もっとこうしたいと思ったこと」の各項目が並べられており，書き込みたいと思ったところに文字を記入できるようになっている．作業学習直後の振り返りの時間は口頭での自己評価も行っている．また作業学習直前に前回の作業内容をビデオで見て，目標を宣言してから作業に入る方法を採用した．

結果と考察：1）教師は振り返りに対してほとんどフィーバックコメントをしていない．特に「自分を褒めたい」の項目には教師のコメント等で見本が示されないと選択できない．2）複数の評点を同じ項目に記述するケース（例えばNとS）は参加した生徒においてもみられた．3）作業前に前回のビデオを見て個人目標を宣言させると，振り返りでもっとこうしたいというN項目への選択がみられる．

3−4.　特別支援学校中学部国語・数学Aグループ（年少者への読み聞かせ）のケースD：

方法：対象生徒は文章のみの表示で自己評価が可能な生徒5名（1年生3名，2年生1名，3年生1名）．小学部や幼稚園児に絵本の読み聞かせを行うための練習を行い，読む様子を映像で振り返ってお互いの良いところを確認したり，頑張りたいところを宣言してもらう形で実施した．そして各授業（全7回）の終了前に振り返りシート（図3）へNES型の自己評価を記入をしてもらう方法を採用した．

結果と考察：1）この様式や自己評価の説明に戸惑う生徒（提出率は欠席も含めて77.1%）もいた．コメントの内容も評点と必ずしも合っていないまま



お話の贈り物（ふりかえりシート）

名前

三回目（10月15日）
読んだ絵本や紙しばいのタイトル「　」
アルファベットに○をつけましょう。
N（もっと良くしたい）E（よくできた！）S（満足している）
選んだ理由…前と同じですが80点です。
読む順番を覚えて遊びながらやったらいいね。

四回目（10月29日）
読んだ絵本や紙しばいのタイトル「　」
アルファベットに○をつけましょう。
N（もっと良くしたい）E（よくできた！）S（満足している）
選んだ理由…もっと上手をよくしたい
「声の魔術師」目指してがんばろうね！

図 3　ケースDの振り返りシート

Akita University

単元が終了したが，この理由は評点の選択に対して教師はほとんどフィードバックしていないためである．2）最初の回で振り返りシートに模範例を紹介し，N（もっとよくしたい）の表記と，対応する選んだ理由の例も付けた．しかし，N評点の選択率は11.1％（コメント内容によれば40.7％）であり，E評点の59.3％，S評点の29.6％に比べて低い選択傾向がみられた．例題がコメント内容に影響している可能性はあるが，評点選択は例題の影響を受けていない．教師のフィードバックにより評点とコメント内容は十分一致させる可能性はあると教師は報告した．

3－5.　小学校特別支援学級　算数・日常生活の指導のケースE：

方法：アスペルガー傾向の小学六年生１名が算数の授業でNESの評点を記入し，その評価に関する本人の口述コメントを教師が代筆して確認させる方式．本人がNES評価に慣れた段階で，日常生活の指導にも実施．

結果と考察：1）本人は自己否定的な傾向が強くC評価的に厳しく捉えていたが，教師の肯定的なコメントを模範として学習の捉え方を学ぶことで，投げやりな態度も減少し，すべて肯定的に捉えるNES評価のやり方に慣れていった．2）慣れていくと課題が出されなくともNES評価を用いるようになり，日常生活の指導にもNES評価を運用できるようになった．

3－6.　小学校特別支援学級（3名）国語・算数のケースF：

方法：対象児童は１年生，３年生，６年生各１名ずつであった．NESの評点（もっとよくしたい，自分はすばらしい，まんぞくしている）に対応する絵と文を教室に掲示しておき，三年生と六年生は振り返りカードの３つの絵のどれかに○をつけ，その右横にコメントを記入するが，１年生は書くことが苦手なので，場合によっては教師が聞き取った内容（①今日はどうだったか？②どれに近い？③どうして？④さらに発言への掘り下げ質問，⑤教師によるフィードバックコメント）を書き留めて確認する方法を取った．行った授業は観点別に国語（説明文を読もう）と算数（余りのあるわり算）で実施した．

結果と考察：1）NES評価の導入で，修正課題や発展課題に関する話し合いがしやすくなった．これまでのABC型の自己評価は褒めてもらうために行うものであったが，NES型の自己評価はめあてに対して正直に振り返る時間になっていると教師は報告した．2）特別支援学級の児童も評価観点を絞れば，めあてに沿って十分自己評価ができる（自分で決めることができる）ことを教師が実感している．3）国語よりも算数の方が導入しやすいのは，「できた/できない」がはっきりわかるのと，国語の観点表現（めあて）がわかりにくいものになっているからだと気がつき，授業改善ができた．

4.　総合的考察

１時間の講習で実施していただいた特別支援学校の全教員に尋ねたアンケート結果（提出は17名）が図４に示されている．NES型学習自己評価法に対する有用性では５から３の範囲に収まったが，どちらとも言えないと答えた教員は，対象となる児童・生徒各々によって有用だったり，そもそも意味が分からずに用を成さなかったりするからである．作業学習や生活単元学習の中では「できた/できない」が明示されるので○×式でも，NES評価でも適合性は高く認定される可能性はある．また，特別支援学校で行われている教科は，本稿では国語・算数であるが，特に国語の場合，評価規準を教師が分かりやすく作れないとNES評価でも難しい可能性がある．さらに特別活動は評点を定めるような活動ではないので，適合性も最も低く出た．このアンケートの提出率は63％で，とくに高等部で少ない．

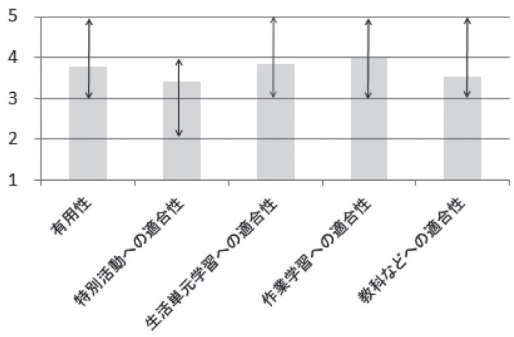


図４　NES型学習自己評価法をお願いしたF学校の教師の捉え方（回答率63％：小63％，中100％，高36％）
（5：極めてある．4：どちらかといえばある．3：どちらとも言えない．2：どちらかと言えばあるようには思えない．1：極めてない．）

Akita University

以下，報告書やアンケート調査を基にまとめると次のようになる．

1）自分の意見や意図をある程度伝えることができる特別支援学校・学級の児童・生徒であれば，めあてに沿った観点でNES型の自己評価ができる．

2）担当教師によるNES評価の説明理解には絵やビデオなどの視覚教材を使った更なる工夫が必要．

3）自己評価に対する教師のコメント指導は欠かせない．

4）NES評価は意欲の向上に繋がると教師は評価している．

5）めあてや観点表現の曖昧さが教師にあると児童・生徒の自己評価判断が難しくなる場合がある．

6）授業改善に利用するためには児童・生徒の自己評価が教師の授業評価にもなっていることに気づく必要がある．

5. 今後の課題

1）たとえ表1のようなもので解説しても，講習が1時間程度の説明ではNES型学習自己評価法を十分理解してもらえない．このようなケースは特別支援学校だけの問題ではなく，一般の小中学校の教師でも見られた（森, 2012）．教師は一般にABC評価や○×選択に慣れており，評点を用いた活動は，教師が最も関心の高い「できなさ」と結びつきやすい．そこで，NES自己評価法とABC自己評価法が異なる次元であることをより表1以上に明確に図示するものを考える必要があり，この説明方法は今後の課題である．

2）ところでNES型学習自己評価法に類した活動は日常全くやっていないかと言えば，必ずしもそうは言えない．特別支援学校や特別支援学級では，実際のところ，振り返りの時間の中で『できていない』ことに気づかせ，『～すればできる』という方法で自己効力感を上げさせ，興味関心を引き出して次の活動へ繋げようと子どもたちに働きかけていることがしばしば見られる．「この活動こそがNES型学習自己評価法の骨格である」と評価認識の転換を教師に促すことができれば，特別支援教育の中でこそNES型学習自己評価法は活用できると考えられないだろうか？実際に有用性に気づいている教師の報告にあるような利用は，特別支援教育においてこそ定着すべきであり，それはもう一つの本研究の今後の課題でもある．

6. 参考文献

文部科学省小学校新学習指導要領総則
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sou.htm

森和彦・堀井綾子・吉野正利・杉山春美（2010）質的情意面に焦点化した観点別学習自己評価法（NES）の実践活用に関する探索的考察　秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，**32**，95-103.

森和彦（2012）NES型学習自己評価法の工夫と改善～公立小学校での非限定的臨床応用による考察～　秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，34，119-128.

Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi,M.（2000）Positive psychology : An introduction. *American Psychologist, 55*（**1**）, 5-14.

Weiner, B.（1972）*Theories of motivation: From mechanism to cognition*, Chicago, Markham Publishing Co.

7. 謝辞

本研究は，科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究（課題番号24653288）の助成を受けて行われた．

さらに本研究を実施するにあたり，多くの特別支援学校，学級の先生方の御支援をいただいた．ここに感謝の意を表したい．また，図らずもこの自己評価の運用実践に参加することとなった児童・生徒たちの誠意ある協力・批判も不可欠であったことを付け加えたい．

Summary

To improve the self-learning evaluation in classes as an ordinal scale, open clinical trial testing of NES-typed Self-Evaluation was carried out for Special Needs Education. As a result, We found out that 1）NES-typed Self-Evaluation has the available in special needs education. 2）NES-typed scale needs the feedback comment by teacher and 3）makes the learning motivation and 4）improve a lesson. And the next research for the more effective activity are proposed, which is

Akita University

presentation skill to make teachers change their recognition of Self-Evaluation.

Key words : Self-Evaluation of learning, Declared Domains of Emphasis, Special Needs Education

(Received February 14, 2014)